

1月の植物

ビワ 枇杷 (バラ科)

学名 : *Eriobotrya japonica* (Thunb.) Lindl.

子どもの頃、隣家の庭に枇杷の大木があり、初夏に実をちぎるために木によく登った。たわわに実った果実は小さくビワと区別してヒワと言っていた。木の先端まで上ると幹がしなりとても怖かった記憶がある。

ビワは高さ 6~10mになる常緑高木で樹皮は滑らかな灰褐色で若い枝には褐色綿毛が密生する。葉は互生し、葉身は 15~20cm の広倒被針形で表面は無毛で光沢がある。11 月から 1 月にかけて円錐花序に芳香のある白色の花弁 5 個をもつ小花が沢山つく。果実は 6 月頃に黄橙色に熟し、甘くて美味。

中国から渡来したと言われるが大分県、山口県、福井県などで野生が確認されていて、奈良時代にはビワの記述もあり、古くから日本にあったらしい。

栽培に適した場所は日当たりが良く、冬季に季節風を受けない暖傾斜地とされ、多久市両子山東斜面の納所地区は適地でビワの栽培が盛んである。宝暦年間に山林 80 ha に栽培されたのが始まりで、梶原治太郎が明治 34 年に淡路島から優良品種を導入して納所ビワの名声があがった。

名は楽器の琵琶の形をした果実がなる木の意味。薬用として葉を使用し、健胃、去痰、皮膚病などの薬効がある。材はしなやかで櫛、杖などに用いられる。

文責：井手義信



2018.1.20 牛津町

参考文献：「樹に咲く花」(山と溪谷社)、「新・佐賀の薬草」(佐賀県)、「佐賀の植物方言と民俗」(佐賀植物友の会)